## ４．社会因子・環境因子と動脈硬化性疾患および危険因子との関連

研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　准教授）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）

これまで、様々な社会因子・環境因子が人々の健康に関与する事が明らかにされてきた。動脈硬化性疾患についても社会因子・環境因子等との関連が報告されている。社会因子等の健康への影響は、個人の社会因子状況だけでなく、人々を支える保健や社会福祉制度等によっても大きく異なる。そのため、海外の知見だけでなく、わが国での検討が必要とされる。

動脈硬化性疾患の予防には望ましい生活習慣による危険因子の予防管理等が重要であることから、本演題では社会因子・環境因子と動脈硬化性疾患の危険因子との関連について、NIPPON DATA 研究で得られた知見を中心に報告する。NIPPON DATA80/90/2010 は、1980 年、1990 年、2010 年に国が実施した国民健康栄養調査および国民生活基礎調査の参加者を対象とした長期追跡研究である。いずれの調査も無作為抽出された全国 300 地区の全住民を対象として実施された事から、これらのコホートは我が国の代表性集団といえる。NIPPON DATA 研究においても就業状況、婚姻状況、教育歴、世帯支出などの社会因子が体格、栄養摂取や喫煙等の生活習慣、健康に関する知識や行動等と関連する事が明らかにされている。

健康格差の縮小は、健康日本 21 の重点課題である。わが国で得られた社会因子・環境因子に関する知見を活用し、より有効な対策を講じる事が望まれる。

**第 64 回日本脈管学会学術総会 学術委員会シンポジウム（2023.10.26～28 横浜市）**